

# NEWS LETTER

図書委員発行 R06年度第2回

## 『マッチング』 内田英治

(L3 小松 結衣)

新たな出会いを求め、現在も多くの人々に利用されているマッチングアプリ。恋愛が苦手な主人公の輪花も親友からの薦めでアプリを始め、吐夢という男と会うことになる。しかし、彼はプロフィールの爽やかそうな印象とは真逆の、恐ろしいほどに不気味な青年だった。一方、世間では「アプリ婚連続殺人事件」が起こっており、その容疑者の1人に吐夢の名前があった。

じわじわとした恐怖を感じる状況描写や、最後にあるどんでん返しには恐ろしくゾッとしますが、それ以上に読了後の謎が解けた爽快感がある作品です。



## 『暇と退屈の倫理学』 國分功一郎

(L4 佐藤 啓達)

この本のジャンルは哲学です。私にとって最初の哲学書だったのですが、結論から言うともものに対する考え方が変わりました。

この本は著者が哲学を語るのではなく、歴史上の哲学者が書いた哲学書や歴史上で起こったこと(中世や近代の富裕層の話や古代の非定住民族の話など)を参考に話をまとめることで、自分を良い方向に導く回答を教えてください。

流れを簡単に説明すると、一章では暇と退屈の原理について、二章から四章は歴史を参考に暇と退屈のどこが違うかなどの説明、五章から七章は前章でまとめられた歴史的に考えた結論を哲学的に説明されています。

この本は東京大学と京都大学で一番読まれた哲学書でオードリーの若林さんもこの本を絶賛されています。是非読んでみてください。

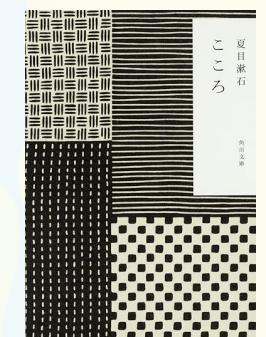


## 『こゝろ』 夏目漱石

(M2 小田桐 萌依)

皆さんも一度は耳にしたことがあるであろうこの作品。私はこの作品を初めて読んだ時、初めて読書の面白さを感じられたと思います。今までそれなりに本を読んではいたのですが、ここまで心を掴んでくるような美しい文章は今の所私は知りません。

内容はネタバレになってしまうのであまり言えませんが、主人公もその他の登場人物も中々行動が突飛で見ていて飽きない作品でもあります。もし興味を持って見ていただけたら嬉しいです。



## 『高校事変』 松岡圭祐

(Z2 種市 翔)

ベトナムから帰化した、バドミントンの有望選手、田代勇次が通う県立武蔵小杉高校。矢幡総理は教育問題に取り組む姿勢を有権者にアピールするために都心からもアクセスがよく話題性の高いその高校を訪問していた。しかし、突如正体不明のテロリストにより、無差別に生徒や教員を殺害し始める事件が起こってしまう。そして、その学校にはもう一人、全国に名が知られた高校生がいた。平成最大のモンスターと恐れられた殺人鬼の娘、優莉結衣。彼女は公安にも目をつけられるほど危険人物だった。

誰もが絶望する中、優莉結衣による、あらゆる人を巻き込んだ反撃が始まる、、、。命のやり取りが、生々しく描かれた一冊です。ぜひ読んでみてください。

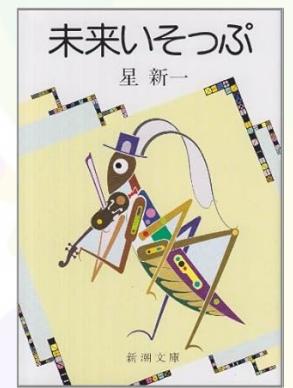


## 『未来いそっぷ』 星新一

(E3 佐藤 響)

この本はショートショートといわれる数ページ程の短編小説を集めたもので非常に読みやすいことが特徴です。著者は星新一さんという方で、「ショートショートの神様」といわれているSF作家で、作品の中には40年ほどたつものもありますが、いまだに読み続けられているほど人気です。この「未来いそっぷ」はタイトルにイソップとあるようにイソップ童話を元とした短編を集めているので見覚えがあるかもしれません。

どの話もあっと驚くような結末になっているので是非読んでみてください。



## 『夜のピクニック』 恩田陸

(C3 原田 実来)

甲田貴子は高校生活最後の行事、夜に全校で約80km歩く「歩行祭」で自分に賭けをする。それは歩行祭でかつて話したことがない同級生西脇融に話しかけるといもの。貴子と融はお互い親友にも言えない関係で入学前から知り合いだが、融は貴子を憎んでいた。あるきっかけで貴子と融は友人と歩行祭でともに行動する。そのときも貴子へ強張った表情しか向けられない融に、声をかけられない貴子。時間は刻々と過ぎてゆき、融は貴子から遠ざかっていく。青春真っ只中の彼女らの奇妙な関係と友情と恋の物語です。



## 『舟を編む』 三浦しをん

(M4 伊藤 俊大)

この本は辞書つくりにとりつかれた人々を描いた作品である。一癖のある主人公、馬締と、お調子者でチャラいところのある西岡はベテラン編集者である荒木の意思を引継ぎ、無事に大渡海を完成させることができるのか。二人の辞書にかける思いが見どころである。この本は辞書つくり以外の登場人物の日常も描かれていることが面白いと感じた。馬締の人間性や人間関係なども楽しめる。意中のひととの恋路も書かれており、どこか切なく、どこか甘酸っぱい気持ちになれる。皆さんもこの本を読んで馬締の生きざまを体験してみてください。



# NEWS LETTER

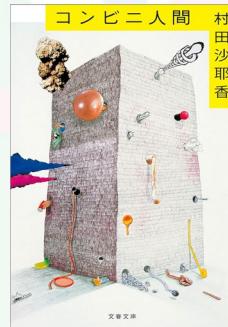
図書委員発行 R06年度第2回

## 『コンビニ人間』 村田沙耶香

(C4 高瀬 紗也)

この本は、社会に適応できない主人公がコンビニで働くことで自分の居場所を見つける物語です。独特の視点から描かれる日常の中で、社会の期待や人間関係の葛藤がリアルに表現され、読む者に深い考察を促します。

ユーモアとシリアスさが絶妙に交錯し、自己のアイデンティティを考えさせられる一冊です。社会との摩擦を描くこの小説は、現代に生きる私たちに大切なメッセージを伝えます。



## 『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル

(E5 木村 友香)

この本は、心理学者である著者ヴィクトール・フランクルの、ナチスの強制収容所での体験の記録です。戦後まもなく発売され、世界的ベストセラーとなりました。

収容所という絶望的な環境の中で希望を失わなかった人たちの姿から、人間の“生きる意味”とは何なのかを探ります。そして苦境に陥った時の“希望”の持ち方について考えていきます。

将来に希望が持てないという人が世の中にはあふれていますが、そのような人にこそ、読んでいただきたい1冊です。



## 『原っぱと遊園地』 青木淳

(Z5 佐々木 大輝)

あらかじめそこで行われることがわかっている建築（遊園地）と、そこで行われることでその中身がつくられていく建築（原っぱ）。空間が先回りして行為や感覚を拘束した遊園地よりも、空間に対して自由にかかわることができる原っぱのほうが、建築にしたときに居心地のいい場になるのではないかと。

青森県立美術館などの設計で知られる建築家・青木淳の著書で、彼の設計に対する方法論が綴られています。モノ・人・空間の関係性への好奇心を掻き立てられる一冊です。



## 『苦しくて切ないすべての人たちへ』 南直哉

(Mコース 准教授 古川 琢磨)

2017年12月に高専に着任して以来、多くの学生が生きづらさや苦しさを抱えている姿を目の当たりにしてきました。とくに厄介なのは、「ただなんとなく苦しい」という漠然とした悩みです。これらは一見「青春の悩み」とも言えますが、私自身もその解決策を模索し続けています。しかし、息苦しさや生活の苦しみは人生に付きまとうものであり、完全には消えないのではないかと感じていました。

そんな折、2023年に訪れた恐山で得た経験が、私の疑問に対する一つの答えとなりました。恐山には宿坊というお寺に泊まれる施設があり、興味本位で宿泊した際に、本書の著者である南直哉氏の説法を聞く機会がありました。彼の語り口はお坊さんというよりも落語家のように、自然と引き込まれました。特に印象に残ったのは、「一時でも、大人から大切にされた実感があれば、その人の人生はそれで満足いくものである」という言葉でした。この説法に、仏教の本質が垣間見えたように思えます。

その後、彼の説法を振り返りつつ、YouTubeの動画も視聴し、仏教の本質について改めて調べてみました。結果、仏教は「生きづらさ」や「苦しみ」を消し去ることではなく、それらを受け入れ、達観するための学問であることが分かりました。南直哉氏は、仏教を「苦しみに対処する方法を示すものであり、『あの世』や輪廻転生を説くものではない」と述べています。本書では、恐山の院代としての著者の経験を語り口調で綴るとともに、諸行無常に対する独自の解釈も含まれています。

本書は全体を通じて、現代社会における生きづらさに焦点を当てています。各章では、仏教の基本的な考え方をわかりやすく解説し、日常生活に潜む漠然とした悩みにどう向き合うべきかを示しています。具体的なエピソードを交えながら、「なぜ人は苦しみを感じるのか」「苦しみをどう受け入れれば良いのか」といった問いに対して、著者は深い洞察を持って答えを導き出しています。特に、目標を過剰に追求することの危険性や「自分探し」の無意味さについても語られており、これらは読者にとって新たな視点を提供するものです。

人はいつの時代も、息苦しさや悩みを抱えることから逃れられません。本書は、苦しみを紛らわせるのではなく、それを受け入れることで得られる心の平穩の重要性を説いています。このエッセンスを知ったうえで世界を見渡すと、過去の先人たちも同様のことを異なる形で教示していることに気がきます。多感な学生の皆さんも、仏教のエッセンスに触れることで、新たな視点を得られるかもしれません。

